「自給する地域」のつくりかた

～経済・資源・人の循環を取り戻すための教科書～

【目次】

- **はじめに：** なぜ、私たちは「忙しいのに豊かになれない」のか？
- **第1章：** 経済の正体 ～お金は「記録」、富は「能力」～
- **第2章：** 地域を支える「3つの経済レイヤー」
- **第3章：** 循環の科学 ～「漏れバケツ」を塞ぐ数式～
- **第4章：** 実践論 ～眠れる資源を「ナリワイ」に変える～
- **第5章：** 政治・行政の役割 ～GDPから「地域自給率」へ～
- **おわりに：** 10年後の生存戦略として

はじめに：なぜ、私たちは「忙しいのに豊かになれない」のか？

1. 地方を覆う「徒労感」の正体

私たちの地域を見渡してみてください。

朝早くから夜遅くまで、多くの大人が懸命に働いています。兼業農家は休日返上で畑に出向き、役場の職員は膨大な事務処理に追われ、観光業の人々は週末の書き入れ時に奔走しています。

誰もサボってなどいません。みんな、必死に働いています。

それなのに、なぜ地域の商店街からはシャッターが減らず、若者は仕事を求めて都会へ流出し、自治体の財政は年々厳しくなっていくのでしょうか？

なぜ、「暮らしが楽になった」「地域が豊かになった」という実感が、これほどまでに持てないのでしょうか？

多くの人が抱えているこの漠然とした「徒労感」。

その正体は、私たちが個人の努力不足にあるのではありません。私たちが乗っている**「地域経済の構造そのもの」に、致命的な欠陥があるから**です。

2. 「稼ぐ」ことばかりに囚われた数十年の過ち

「地域を元気にしよう」と考えたとき、多くの政治家やリーダーはこう叫びます。

「観光客をもっと呼ぼう！」

「企業を誘致して雇用を作ろう！」

著：末次克洋

「特産品を東京や海外で売ろう！」

これらはすべて、**「外からお金を稼いでくる（外貨獲得）」**という発想です。もちろん、これも間違いではありません。しかし、過去数十年、日本中の地方自治体がこの競争に明け暮れた結果、どうなったでしょうか？

巨額の税金を投じて立派な観光施設を作り、補助金で企業を呼び込みました。一時的に売上は上がり、数字上のGDPは増えたかもしれません。しかし、ブームが去れば施設は負の遺産となり、不況になれば工場は撤退していきます。

私たちは、バケツに必死で水を注ぐことばかりに気を取られ、**バケツの底に巨大な穴が空いていること**に気づいていなかったのです。

3. 地域経済は「穴の空いたバケツ」になっている

私たちの財布や、地域の経済循環を「バケツ」だと想像してください。

一生懸命働いて稼いだお金（水）は、地域に入ってきます。しかし、そのお金はどこへ消えているでしょうか？

- **エネルギー代：** ガソリン、電気、灯油。これらのお金は、ほぼ100%、地域を素通りして中東の産油国や東京の大手電力会社へ送金されています。
- **食料品・日用品：** 地元に畑があるのに、大手スーパーに並ぶ野菜や肉の多くは他県産や外国産です。売上の大部分は、本社のある大都市へ吸い上げられます。
- **ネット通販：** 必要な資材や道具をAmazonなどのネット通販で買えば、その決済手数料と利益は、瞬時にアメリカや東京へ流出します。

これが**「地域経済の漏れバケツ（Leaky Bucket）」**現象です。

現代の地方経済は、稼いだ端から、そのお金がものの数秒で地域外へ流出するシステムになっています。これでは、いくら観光客を倍に増やしても、ザルに水を注ぐようなもので、地域に富は蓄積されません。

4. 失われたのは「お金」ではなく「自給する能力」

さらに深刻なのは、お金が流出すること以上に、**「お金と引き換えに、自分たちで生み出す力を捨ててしまったこと」**です。

かつて、地域には「エネルギー（薪・炭）」を山から調達する技術がありました。「食料」を地域で賄うネットワークがありました。「家」を直し、道具を作る職人がいました。

しかし、「買ったほうが安い」「効率的だ」という理由で、それらをすべて外部からの購入に切り替え、自分たちの手で生み出すことをやめてしまいました。

その結果、私たちは**「お金がないと生きていけない」という極めて脆弱な状態**に陥りました。

世界情勢の変化で原油価格が上がれば、地域のボイラーは止まります。物流が止まれば、スーパーの棚は空になります。

「お金（購入）」に依存しすぎた結果、地域としての「生存能力（生産能力）」を失ってしまったのです。

5. 「稼ぐ」から「巡らせる」へ

今、私たちが目指すべきは、これ以上バケツに水を注ぐ競争をすることではありません。

バケツの穴を塞ぐことです。

- 中東から買っていた灯油をやめて、裏山の木で熱を作る（エネルギーの自給）。
- 遠くから運ばれてくる野菜をやめて、隣の農家から買う（食の地産地消）。
- 大手ゼネコンに頼んでいた工事を、地元の職人に頼む（技術の地域内循環）。

地域外へ流出していたお金を、地域内の隣人への支払いに切り替えること。

そうすれば、たった1万円のお札でも、AさんからBさんへ、BさんからCさんへと地域内を旅し、何倍もの価値を生み出します。

本書は、人口減少社会における唯一の希望である**「地域内経済循環」**と**「自給圏」**の作り方を、精神論ではなく、経済合理性に基づいて解説する「実践の書」です。

忙しいだけの毎日から抜け出し、本当の豊かさを取り戻すための挑戦を、ここから始めましょう。

第1章：経済の正体 〜お金は「記録」、富は「能力」〜

1-1. お金という「共同幻想」から目覚める

地域づくりを議論する際、必ず最初に出る言葉があります。「予算がない」「お金がない」。

まるで「お金さえあれば全て解決する」と信じ込んでいるかのようです。しかし、私たちは一度立ち止まって、そもそも「お金とは何か？」という根本的な問いに向き合わなければなりません。

一万円札の原価は「約20円」

私たちがありがたがっている一万円札。物質として見れば、それは原価約20円の、インクが塗られたただの紙切れです。

なぜ、この紙切れで米が買え、家が建ち、人が動くのでしょうか？

それは、日本という国家が「この紙には価値があることにしよう」と法律で定め、私たち全員がそれを「信じている」からです。つまり、お金とは**「共同幻想（フィクション）」**の上に成り立つシステムに過ぎません。

お金の本質は「借用の記録（レシート）」

経済学的に見れば、貨幣の本質は**「債務の記録」です。

誰かが価値あるモノやサービスを提供したとき、「あなたはこれだけの価値を提供しました」という証明書として渡されるのがお金です。つまり、お金は価値そのものではなく、「過去に誰かに貢献したという記録（レシート）」であり、「将来、誰かに働いてもらえる権利（チケット）」**なのです。

ここで重要なのは、「記録（お金）」と「実体（モノ・サービス）」は別物だということです。

ライブのチケット（記録）をどれだけ大量に持っていても、肝心のアーティスト（実体）がいなくなれば、そのチケットはただの紙くずです。

地域経済も同じです。いくら自治体に貯金（チケット）があっても、地域に働く人や資源（実体）がいなくなれば、その地域は滅びます。

1-2. 「富」の定義を書き換える

現代社会の最大の不幸は、「お金（記録）」を増やすことを自己目的化してしまい、本来の「富（実体）」を疎かにしてしまったことにあります。

では、地域にとっての本当の「富」とは何でしょうか？

富とは「生産能力（Production Capability）」である

本書では、「富」を**「生きるために必要なものを、自分たちの手で生み出し続ける能力」**と定義します。

想像してください。

ある日突然、世界的な金融危機が起き、日本円が暴落してハイパーインフレになったとします。スーパーの棚からは商品が消え、ガソリンスタンドは閉鎖されました。

- **Aの地域：** 住民は数億円の貯金を持っているが、畑はなく、山は荒れ、誰も野菜の作り方を知らない。
- **Bの地域：** 住民の貯金はほとんどないが、手入れされた山があり（燃料）、豊かな農地があり（食料）、家を直せる職人と、助け合えるコミュニティがある。

どちらが「豊かな地域」でしょうか？ どちらが生き残れるでしょうか？

答えは明白です。Bの地域です。

Aの地域にとって、札束は寒さをしのぐための焚き付けにしかなりませんが、Bの地域は、お金というシステムが停止しても、人間らしい暮らしを続けることができます。

この**「いざという時に、自分たちを生かしてくれる土台」**こそが、真の富なのです。

1-3. 現代の悲劇：「お金」を得るために「能力」を売ってしまった

かつての日本の地域社会には、この「生産能力」が溢れていました。

山から薪を切り出し（エネルギーの自給）、畑で食べ物を作り（食の自給）、冠婚葬祭を地域のみんなで執り行っていました（サービスの自給）。

しかし、高度経済成長期以降、私たちは恐ろしい取引をしてしまいました。

「便利で効率的だから」という理由で、お金を払って外部から買うことを選び、その代償として「自分たちで作る能力」を放棄してしまったのです。

- 薪ストーブをやめて灯油を買うことで、「山を管理する能力」を失いました。
- 地域の普請（土木工事）を業者に外注することで、「道を直す能力」を失いました。
- ご近所の助け合いをやめて介護サービスを買うことで、「互助の能力」を失いました。

「お金さえあれば買える」という安心感は、裏を返せば**「お金がないと何もできない無力な存在」**への転落を意味します。

これが、現在の地方が抱える「弱さ」の正体です。地域が貧しいのは、お金がないからではありません。お金に依存しすぎて、手足をもがれた状態になっているからです。

1-4. 地域の生存戦略：「能力」を取り戻す旅へ

私たちが目指すべき「地方創生」とは、東京から企業を呼んできて税収（お金）を増やすことではありません。

一度手放してしまった**「生産能力（富）」を、もう一度地域に取り戻すこと**です。

これは「昔の不便な生活に戻れ」という意味ではありません。

現代のテクノロジーや知識（ドローンによる森林管理、高効率なバイオマスボイラー、断熱改修技術など）を使いながら、**「新しい自給」**を構築するのです。

- **エネルギー：** 海外の油田に頼らず、地域の森の熱を使う。
- **食：** 大規模流通に頼らず、顔の見える農家とつながる。
- **生業（ナリワイ）：** 誰かに雇われるだけでなく、地域の困りごとを解決して対価を得る。

お金は、あくまでそのための「潤滑油」であり「道具」です。

道具に使われるのではなく、道具を使いこなし、自分たちの足で立つ。

次章からは、そのための具体的な経済構造（3つのレイヤー）について解説します。

第2章：地域を支える「3つの経済レイヤー」と「お金が生まれる場所」

2-1. 経済は「一枚岩」ではない

「地域経済を回す」と言ったとき、多くの人は、今あるお金をどう使うか（消費）ばかりを考えがちです。しかし、それだけでは地域のパイは大きくなりません。

地域経済を正しく理解するためには、原理原則が異なる**「3つの層（レイヤー）」と、それらを貫く「お金が新しく生まれるメカニズム（信用創造）」**を理解する必要があります。

この構造を無視して、やみくもに補助金を配ったり、借金を忌み嫌って投資を控えたりすることが、地域の衰退を加速させています。まずは全体像を俯瞰しましょう。

2-2. お金はどこから来るのか？ 〜「信用創造」という魔法〜

各レイヤーの説明に入る前に、非常に重要な前提を共有します。それは**「新しいお金は、誰かが借金をすることで作られる」**という事実です。

私たちは、お金は「中央銀行が印刷して配っている」と思いがちですが、実際は違います。

地元の企業や自治体が、銀行から**「事業のために借入（投資）」を行った瞬間、通帳に数字が書き込まれ、この世に新しいお金が誕生します（これを経済学で信用創造**と呼びます）。

- **前提条件：** ただし、無闇にお金を増やせば良いわけではありません。地域の**「生産能力（モノやサービスを生み出す力）」**が増える分に合わせて、お金を増やす必要があります。
- **健全な借金：** 新しい機械を買って生産力を上げるための借金は、地域にお金を供給し、富を増やす「善」です。
- **結論：** 地域を豊かにするためには、事業者や行政が勇気を持って銀行から資金を引き出し、それを「生産能力の向上」に投資し続ける必要があるのです。

2-3. 【第1層：土台】贈与・信用経済（Community / Trust）

原理：「記憶（Memory）」と「信用（Credit）」の集積

ピラミッドの土台です。ここには貨幣は介在しませんが、すべての経済活動の源泉となる**「信用」**が蓄積される場所です。

- **特徴：** お金を介さない互助。「困った時はお互い様」「消防団活動」「祭りの運営」。
- **役割：銀行が融資をする（＝お金を作る）際の判断基準は、その人や地域の「信用」です。** 第1層の人間関係や信頼がしっかりしている地域ほど、いざという時に資金を引き出す力（金融力）を持ちます。この土台が崩れた地域では、銀行も怖くてお金を作れません（貸せません）。

2-4. 【第2層：中間】市場経済（Business / Production）

原理：「投資（Investment）」と「記録（Money）」の循環

ここが、地域経済のエンジンとなる層です。

地域の事業者（企業・個人事業主）は、単に商品を売買するだけでなく、**「お金を作る主体」**としての重要な役割を担っています。

- 役割① 生産能力の向上：
  地域の資源（木、土、農地）を価値あるものに変えるための設備や技術を持つこと。これこそが地域の「富」の実体です。
- 役割② 信用創造（お金のポンプ）：
  事業者が「新しい加工場を作りたい」と事業計画を立て、銀行から借入をする。この瞬間、地域に新しいお金が供給されます。
  つまり、意欲ある事業者がリスクを取って投資（借金）をすることが、地域全体のお金の量を増やす唯一の方法なのです。

逆に言えば、地域の事業者が「借金は悪だ」と縮こまり、現状維持で投資をやめてしまえば、地域のお金は減り続け（返済による消滅）、ジリ貧になります。

2-5. 【第3層：上部】公共経済（Public / Infrastructure）

原理：「予算（Budget）」と「公債（Public Debt）」

行政や自治体が担う層です。ここもまた、巨大な「お金の作り手」です。

- 役割① 環境の整備：
  第2層の事業者が活動しやすくするためのインフラ（道路、水道、通信）や、第1層が安心して暮らすための福祉を整備します。
- 役割② 公的な信用創造：
  自治体が発行する「地方債（借金）」もまた、地域に新しいお金を生み出す行為です。
  重要なのは、その借金が**「将来の生産能力を高める投資」に使われているかどうか**です。
  - **悪い借金：** 何も生まない豪華な庁舎や、誰も使わないハコモノを作るための借金。（将来の負担になるだけ）
  - **良い借金：** 地域の木材を搬出しやすくする林道の整備や、若者が起業するための拠点整備。（将来の税収や産業を生む）

2-6. 現代の病理と処方箋

病理：投資を忘れた「縮小均衡」

今の地方経済が抱える最大の問題は、行政も事業者も「借金を減らすこと（緊縮）」ばかりを考え、「生産能力を高めるための投資（健全な借金）」をやめてしまったことにあります。

投資がなければ生産能力は落ち、生産能力が落ちれば地域は貧しくなり、貧しくなるから投資ができない。この「負のあえぎ」に陥っています。

処方箋：3つの層を連動させる

「豊かな地域」を取り戻すためのプロセスは以下の通りです。

1. **第1層（土台）を固める：** 住民同士が顔の見える関係を作り、地域の「信用」を高める。
2. **第3層（行政）が呼び水を入れる：** 交付金や地方債を活用し、リスクを取って未来への投資（インフラ・拠点整備）を行う。
3. **第2層（事業者）が動く：** 整備された環境と信用を背景に、銀行から資金を調達し、新たなナリワイ（生産能力）を作る。
4. **結果：** 生産能力が増えた分だけ、地域に新しいお金が生まれ、循環し始める。

本書で提唱する「地域内経済循環」とは、単に今あるお金を回すだけでなく、**「地域の信用を担保に、必要な分だけ自分たちでお金を生み出し（借入）、それを生産能力に変えていく」**という、ダイナミックな富の拡大プロセスなのです。

第3章：循環の科学 〜「漏れバケツ」を塞ぐ数式〜

3-1. 私たちの地域は「植民地経済」になっていないか？

穴の空いたバケツ理論（Leaky Bucket Theory）

地域経済を考える際、私たちは「いくら稼いだか（入り口）」ばかりを気にします。観光客数、農産物の出荷額、工場誘致による税収。これらはすべて、地域というバケツに注がれる「水」の話です。

しかし、経済学的に見て、地域の豊かさを決定づけるのは「水の量」ではありません。**「バケツの中に水が留まっている時間」**です。

想像してください。

巨額の公共事業費や観光収入が入ってきました。しかし、その工事を請け負ったのが都内の大手ゼネコンであり、観光客が泊まるのが外資系ホテルであり、使われたガソリンが大手元売り企業のスタンドだったとしたら？

水はバケツに入った瞬間、底に空いた巨大な穴から、東京や海外の本社へと流れ出てしまいます。

これを経済地理学では**「支店経済」あるいは「植民地経済」**と呼びます。

地域のリソース（労働力・土地・自然）を使いながら、利益（富）はすべて中央へ吸い上げられる構造。これでは、いくら働いても地域が豊かにならないのは物理的に当然なのです。

3-2. 地域経済乗数効果（LM3）の魔法

では、どうすれば水は留まるのでしょうか？ ここで**「地域経済乗数（Local Multiplier 3 = LM3）」**という指標が登場します。

これは、お金が地域内で何回「手渡されたか」を測定するものです。

【数式】 豊かさ ＝ 初期投資額 × 循環回数

例えば、地域に「1億円」の交付金が入ったとします。

- **ケースA：漏れバケツ経済（循環率 1.0）**
  - 役場が1億円で大手ゼネコンに工事を発注。
  - ゼネコンは資材も下請けも全て県外から調達。
  - **地域の経済効果：1億円（最初の1回のみ）**
- **ケースB：循環型経済（循環率 2.5）**
  - **1回転目：** 役場が1億円で**地元の工務店**に工事を発注。
  - **2回転目：** 工務店は、**地元の製材所**から木材を買い、**地元の職人**に給料を払う（地域内調達率80%＝8000万円が残る）。
  - **3回転目：** 職人は、その給料で**地元のスーパー**で食材を買い、**地元の居酒屋**で飲む（地域内消費率60%＝4800万円がさらに残る）。
  - **地域の経済効果：1億円 ＋ 8000万円 ＋ 4800万円... ＝ 約2.3億円〜2.5億円**

著：末次克洋

驚くべきことに、同じ「1億円」の予算でも、地域内循環の仕組みがあるかどうかで、経済効果には2倍〜3倍の開きが出ます。

外部から予算を引っ張ってくる労力を使うよりも、地域内の循環率を高める方が、はるかに効率よく地域を豊かにできるのです。

3-3. 巨大な「3つの穴」を特定する

循環率を高めるためには、バケツの「どこに穴が空いているか」を知る必要があります。日本の地方自治体において、共通して空いている巨大な穴は以下の3つです。

① エネルギーの穴（最大の流出）

これが最も深刻です。電気代、ガソリン代、灯油代。

人口1万人規模の町でも、年間数十億円規模のお金がエネルギー代として地域外（中東の産油国や東京の電力会社）へ流出しています。これは地域住民が稼いだ富が、そのまま「税金」のように外へ吸い上げられているのと同じです。

② 食と日用品の穴

地元の畑で採れる野菜を、地元のスーパーが扱わず、わざわざ遠くの市場から仕入れているケースは少なくありません。また、日用品や資材をAmazonなどのネット通販で買えば、その決済手数料と利益は瞬時にシリコンバレーや東京へ飛びます。

③ 金融の穴（見えない流出）

私たちが地元の銀行や郵便局に預けた「貯金」。このお金はどう使われているでしょうか？

地元に有望な投資先（借入をする事業者）がなければ、そのお金は東京の金融市場へ運ばれ、国債や海外投資に使われます。

「地域のお金が、地域の産業を育てるために使われていない」。これも巨大な漏れの一つです。

3-4. 輸入代替：地域を取り戻す「塞ぐ」技術

バケツの穴を塞ぐための経済戦略を**「輸入代替（Import Substitution）」**と呼びます。

これまで外部から買っていた（輸入していた）ものを、地域内で生み出す（自給する）ものに置き換えることです。

1. エネルギーの輸入代替

- **Before:** 灯油を買って暖房する（年間10万円流出）。
- **After:** 裏山の木を使った薪ボイラーやストーブを導入する。
    - 効果：10万円が「近所の薪生産者」の収入になる。山が整備され、災害も減る。

2. 食の輸入代替

- **Before:** 給食センターが冷凍の輸入食材を使う。

- **After:** 給食の食材を「全量地元産」にする。
    - 効果：子どもたちの健康が守られるだけでなく、地元の農家に安定した巨大な市場（買い手）が生まれ、農業が「儲かるナリワイ」に変わる。

3. 技術の輸入代替

- **Before:** 家の断熱改修を大手ハウスメーカーに頼む。
- **After:** 地元の工務店が断熱施工技術を学び、受注する。
    - 効果：工事費が地域に落ち、住宅のエネルギー効率が上がり、さらに流出が減る。

3-5. 結論：小さく回せば、大きくなる

「グローバル経済から鎖国しろ」と言っているわけではありません。スマホもパソコンも、地域では作れないものは外から買えばいいのです。

しかし、**「自分たちで作れるもの（エネルギー・食・住まい）」まで、思考停止して外から買っていないか？** という問い直しが必要です。

地域内でお金を1回多く回すこと。

それは、単なる消費活動ではなく、「隣人の生活を支え、自分の生活も支えられる」という最強の投資活動です。

この数式の意味を理解したとき、私たちは「安いから」という理由だけでモノを選ぶことの危うさに気づくはずです。

次章では、この理論を具現化し、実際に地域で「ナリワイ」を作る実践手法について解説します。

第4章：実践論 〜眠れる資源を「ナリワイ」に変える〜

4-1. 「ビジネス」ではなく「ナリワイ（生業）」を作る

具体的な手法に入る前に、言葉の定義をしておきましょう。

私たちが目指すのは、急成長や上場を目指す「スタートアップ（企業）」ではありません。地域に根ざし、暮らしと仕事が溶け合った**「ナリワイ（生業）」**です。

- **企業（Business）：** 拡大・成長を目的とする。単一の事業で大きな売上を狙う。効率化を最優先する。
- **生業（Nariwai）：** 継続・生存を目的とする。複数の小さな仕事を組み合わせる（百姓的働き方）。地域の困りごと解決がそのまま仕事になる。

人口減少時代の地域に必要なのは、売上10億円の工場が1つあることよりも、売上500万円のナリワイが200個あることです。

前者は撤退すれば地域が死にますが、後者はいくつかが潰れても地域全体は揺るぎません。この「多品種少量生産」の経済生態系を作ることこそが、最強のリスクヘッジです。

4-2. ステップ1：資源の可視化 〜「あるもの」を再定義する〜

地域には「何もない」のではありません。「見えていない」だけです。

資源の可視化とは、単なるリストアップではなく、「厄介者」を「宝物」に見立て直す（リフレームする）作業です。

① 森林資源：「放置された山」⇒「緑の油田」

「木材価格が安いから切らない」というのは、木を「建築資材」としてしか見ていないからです。

視点を変えれば、山は**「エネルギー源（熱）」**であり、**「保水装置（防災）」**であり、**「炭素固定装置（環境価値）」**です。

特に「熱エネルギー」としての価値は絶大です。灯油換算でいくらの価値が山に眠っているかを計算し、マップ化することから始めます。

② 遊休不動産：「負動産」⇒「インキュベーション施設」

空き家や耕作放棄地は、所有者にとっては固定資産税がかかるだけの「負債」ですが、起業家にとっては初期投資を抑えられる「資産」です。

単に「住む家」としてだけでなく、**「加工場（ジャム、木工）」「シェアオフィス」「資材置き場」**としての適性を調査します。「誰の持ち物か」「いくらなら貸してもらえるか」という権利関係の整理（データベース化）が、全てのスタートラインです。

③ 公共的空間：「維持管理の負担」⇒「ウェルネス資源」

草刈りが大変なだけの林道、誰も通らない農道、ただ流れている用水路。

これらは、都市住民から見れば**「最高の散策路（セラピーロード）」であり、「小水力発電の適地」**です。

「管理しなければならないコスト」を「収益を生むプロフィットセンター」へと定義し直します。

4-3. ステップ2：再編集（マッチング） 〜掛け算の錬金術〜

可視化された資源は、そのままではお金になりません。地域の**「課題（困りごと）」**と掛け合わせることで、初めて事業になります。これを**「編集」**と呼びます。

【編集例A】 「間伐材（資源）」×「灯油高騰（課題）」

- **事業化：** 地域で「薪」や「チップ」を製造し、公共施設やハウス農家に熱として販売する。
- **効果：** 山がきれいになり（防災）、安価な暖房が得られ（コスト減）、薪作りという雇用が生まれ（ナリワイ）、灯油代の流出が止まる（循環）。一石四鳥のモデルです。

【編集例B】 「空き家（資源）」×「職人がいない（課題）」

- **事業化：** 空き家をリノベーションする過程自体をワークショップ化し、DIY技術を学ぶ学校にする。
- **効果：** 家が直るだけでなく、地域住民が「家を直すスキル（生産能力）」を獲得できる。卒業生がそのまま「地域の便利屋」として起業する。

【編集例C】 「規格外野菜（資源）」×「買い物難民（課題）」

- **事業化：** 市場に出せない野菜を集め、高齢者宅への移動販売やお弁当の宅配を行う。
- **効果：** フードロスが減り、高齢者の見守りになり、農家の副収入になる。

4-4. ステップ3：事業化の鉄則 〜小さく生んで、つなげる〜

ナリワイを立ち上げる際、絶対にやってはいけないのが「最初から立派な建物や機械を入れること」です。

成功の鉄則は**「小商い（こあきない）」**からのスタートです。

1. 「3割」の仕事を組み合わせる（X-Crop）

一つの仕事で月30万円稼ごうとすると、無理が生じ、外部資本との競争になります。

そうではなく、**「薪作り（月10万）」＋「農業（月10万）」＋「テレワーク事務（月10万）」**のように組み合わせるのです。

これを「半農半X」ならぬ「多業（X-Crop）」**と呼びます。季節変動に強く、地域の繁忙期に合わせて柔軟に動ける、農山村に最適な働き方です。

2. 地域内調達を「ルール化」する

事業を始める際、徹底して**「地域内のものを優先して使う」ことを自分たちのルールにします。

チラシ印刷はネットではなく地元の印刷屋へ。店舗の内装は地元の材木で。

多少高くついたとしても、それは相手への「投資」であり、巡り巡って自分の客として返ってきます。この「お互い様」の連鎖**を作れるかどうかが、持続の鍵です。

3. 「不便」を価値に変える

東京と同じ利便性を目指してはいけません。勝てないからです。

むしろ、「不便であること」「手間がかかること」を価値にします。

- ボタン一つでつく暖房より、手でくべる薪ストーブの暖かさ。
- 形が揃ったスーパーの野菜より、泥付きの不揃い野菜の味。

この**「身体性」**や**「物語」**こそが、第2層（市場経済）において、大資本が真似できない最大の付加価値となります。

4-5. 結論：自給率90%の世界が「外貨」を呼ぶ

矛盾するように聞こえるかもしれませんが、**「地域の人たちのために、地域のものを徹底して使っている（自給している）地域」**こそが、結果として外の人（観光客・移住者）を強く惹きつけます。

なぜなら、どこにでもあるチェーン店や既製品で溢れた町には、わざわざ行く理由がないからです。

その土地の木で建てられた家に住み、その土地のエネルギーで暖まり、その土地の食を食べる。

この**「独自の循環（生態系）」**が完成した時、それは唯一無二のブランドとなり、結果として観光や移住という形で外貨も獲得できるようになるのです。

まずは、外を見るのをやめて、足元を見ましょう。

そして、小さなナリワイを一つ、作り始めましょう。それが世界の景色を変える第一歩です。

第5章：政治・行政の役割 〜「予算の管理者」から「未来の投資家」へ〜

5-1. 行政は「地域通貨の供給源」である

まず、政治家や行政職員が持っている「お金」に対する根本的な誤解を解く必要があります。

多くの自治体は、「税金という限られた財布から、いかに節約して使うか」という**「家計簿の論理」**で運営されています。

しかし、行政（および地域企業）には、家計にはない強大な権能があります。それが**「信用創造（Credit Creation）」**です。

地域経済において、お金は天から降ってくるものではありません。行政や事業者が「将来の成長」を信じて銀行から借入（投資）を行った瞬間、その地域に新しいお金が産み落とされるのです。

- **行政が縮み志向になれば：** 借金を恐れて投資を控えれば、地域に出回るお金の総量が減り、デフレと衰退が加速します。
- **行政が投資家になれば：** 地域の生産能力を高めるために正しく借入（起債）を行えば、地域にお金が供給され、仕事が生まれ、経済は拡大します。

これからの行政の役割は、単なるサービスの提供者ではありません。

「地域に必要な『生産能力』を見極め、それに見合った『貨幣』を大胆に供給する、地域経済のエンジン」としての役割です。

5-2. 「良い借金」と「悪い借金」を見極める

「借金をしてお金を作ろう」と言うと、無責任なバラマキ批判を受けるかもしれません。しかし、借金には明確に2種類あります。

× 悪い借金（将来の負担）

何も生まないもの、単なる消費、維持費がかかるだけのハコモノ建設のための借金です。これは将来の税金で埋め合わせるしかない「負債」です。

○ 良い借金（未来への投資）

「将来の生産能力（富）を高めるための借金」です。

例えば、10億円の地方債（借金）を発行して、地域の森林からエネルギーを取り出すプラントを作ったとします。

- **借金：** 10億円増える。
- **資産：** 毎年1億円のエネルギー代（流出していたお金）を削減できる「生産設備」が手に入る。
- **結果：** 10年で元が取れ、その後は永続的に地域を豊かにする。

このように、**「地域の生産能力（稼ぐ力・防ぐ力）の増加」につながる借入は、地域にお金を供給する「正義」です。

行政が恐れるべきは、借金そのものではなく、「投資すべき時に投資せず、地域の生産能力を衰退させてしまうこと」**なのです。

5-3. 民間の「信用創造」を誘発する（呼び水機能）

地域経済が活性化するかどうかは、行政だけでなく、地域の事業者（第2層）がどれだけ銀行からお金を借りて、新しい事業（ナリワイ）を作れるかにかかっています。

しかし、リスクがある事業には、銀行も簡単にはお金を貸せません（お金を作れません）。

ここで行政が果たすべきは、**民間の信用創造を助ける「リスクテイク（呼び水）」**の役割です。

ケーススタディ：薪ボイラー事業の立ち上げ

- **現状：** 民間事業者が薪ボイラー事業をやりたいが、売れるかわからないので銀行が貸してくれない。
- **行政の介入：** 「役場本庁舎と学校の熱源をすべて薪にする」と決定し、**10年間の買取保証（オフテイク契約）**を結ぶ。
- **信用創造の発動：** 行政の保証（信用）があるため、銀行は安心して事業者に融資できる。事業者は設備投資を行い、地域に新しいお金と雇用が生まれる。

行政が自らやる必要はありません。行政が**「最初の確実な顧客」**になることで、民間がお金を生み出せる環境を作る。これが最も賢い経済政策です。

5-4. 公共調達を変える ～地域内循環の防波堤～

行政が作り出した（あるいは税金として集めた）お金を使う際、最も重要なルールがあります。

それは、**「地域内で生産されたものを買う」**ということです。

せっかくリスクを取って公共投資をしても、その発注先が東京のゼネコンや海外製品であれば、作り出したお金は一瞬で地域外へ蒸発します。

行政は地域最大のバイヤーとして、以下の**「地域優先調達（Local First）」**を徹底しなければなりません。

1. **エネルギー調達：** 役場の電気や熱は、地域電力や地域バイオマスから買う。
2. **食料調達：** 学校給食は、地元の有機農家から適正価格で買う。
3. **公共工事：** 大規模一括発注をやめ、地元の工務店が受注できるサイズに分割発注する。

「高いから」といって安易に外部から買うことは、「地域内でお金が回るチャンス（乗数効果）」を自ら捨てているのと同じです。

多少単価が高くても、その代金が地域住民の給与となり、巡り巡って税収として戻ってくるならば、それは「コスト」ではなく「地域への還流」です。

5-5. 新しいKPI（評価指標）の設定

GDP（域内総生産）だけを追いかける時代は終わりました。

行政は、投資の成果を以下の「地域の強さ」を測る指標で評価すべきです。

- **生産能力向上率：** 投資によって、地域内で「作れるもの（エネルギー・食・製品）」がどれだけ増えたか？
- **信用創造額（域内貸出残高）：** 地域の金融機関から、地元企業への融資額がどれだけ増えたか？（＝事業意欲のバロメーター）
- **地域内循環率：** 投入された予算が、地域外へ流出するまでに何回地域内で回転したか？

5-6. 「減らす政治」から「生み出す政治」へ

最後に、首長や議員の皆様へ。

「財政健全化」や「借金削減」は、聞こえの良いスローガンですが、それを目的化した途端、地域は縮小均衡（ジリ貧）の罠に落ちます。

政治の役割は、通帳の数字を合わせることではありません。

「この地域には、もっと豊かな暮らしを生み出すポテンシャル（生産余力）がある」と信じ、そのポテンシャルを開花させるために、勇気を持ってお金という血液を送り込む（投資する）ことです。

- 放置された山林があるなら、林道整備という投資を。
- 使われていない空き家があるなら、リノベーション補助という投資を。
- やる気のある若者がいるなら、挑戦できるフィールドへの投資を。

未来の生産能力を作るための「良い借金」を恐れないでください。

「お金がないからできない」のではなく、**「お金を作ってでもやる価値がある未来」**を提示し、合意形成を図る。

それこそが、リーダーに求められる真の「政治決断」です。

おわりに：10年後の生存戦略として ～「清貧」から「投資」へ～

1. 「お金がない」という呪いを解く

本書の最後に、私たちが地域づくりにおいて最も陥りやすい「思考の罠」を解除したいと思います。

それは、「うちの地域にはお金がない」「財政が厳しいから何もできない」という諦めです。

しかし、第2章で学んだ通り、お金（貨幣）とは天から降ってくるものでも、誰かから奪い取るものでもありません。

行政や事業者が、地域の未来の可能性を信じ、勇気を持って「投資（借入）」を決断した瞬間に、無から有として産み落とされるものです。

地域が貧しいのは、本当にお金がないからではありません。

「私たちには、もっと価値を生み出す力がある」という自分たちへの信頼（Credit）を失い、お金を生み出すポンプ（投資）を自ら止めてしまっているからです。

2. 「借金」の正体を再定義する

これからの10年、私たちは「借金」という言葉のイメージを180度変える必要があります。

もし、将来の世代にツケを回すだけの「浪費」ための借金なら、それは悪です。

しかし、地域の生産能力（稼ぐ力・生きる力）を高めるための借金は、「未来へのプレゼント」であり、地域経済を拡大させる唯一のエンジンです。

- 放置された山林を「エネルギーの油田」に変えるためのプラント建設。
- 耕作放棄地を「食料基地」に変えるための農機具導入。
- 空き家を「若者の起業拠点」に変えるためのリノベーション。

これらを行うために銀行から資金を引き出すことは、恥ずべきことではありません。

それは、地域の資源を担保に**「新しい地域通貨を発行する」**のと同じ、崇高な経済行為なのです。

生産能力が増えるならば、それに見合ってお金が増えるのは、経済として最も健全な姿です。

3. 私たちが子供たちに残すべき「バランスシート」

よく「子供たちに借金を残すな」と言われます。

しかし、借金を減らすためにインフラを直しもせず、産業も育てず、ボロボロになった地域を「無借金」で渡された子供たちは、果たして幸せでしょうか？

私たちが残すべきは、きれいな帳簿ではありません。

たとえ負債の部に数字があったとしても、資産の部にそれ以上の価値がある**「稼働する生産設備（ナリワイ）」**です。

- **「このボイラーの借金は残っているが、これがあるおかげで、村はずっと暖房費がタダだ」**
- **「この加工場のローンは残っているが、ここから毎年〇〇万円の売上が生まれている」**

そう胸を張って言える「生きた資産」こそが、次世代が最も欲している遺産です。

4. あなたが最初の「投資家」になる

地域を変えるのは、遠い国の偉い人ではありません。

「この地域には価値がある」と信じ、リスクを取って動く「あなた」です。

あなたが地元の工務店に家の修理を頼むこと。

あなたが銀行から融資を受けて小さな店を開くこと。

行政が交付金を使って、未利用資源の活用に踏み切ること。

これら一つひとつが、地域に血液（お金）を送り込み、筋肉（生産能力）を育てる「投資」です。

縮小均衡の宴は終わりました。これからは、あるものを最大限に活かし、必要な分だけお金を作り出し、豊かさを循環させる**「拡大均衡」**の時代です。

5. さあ、エンジンを回そう

10年後の未来は、まだ決まっていません。

もし私たちが「節約」と「諦め」を選べば、地域は静かに消滅するでしょう。

しかし、私たちが「投資」と「循環」を選べば、そこには自給自足を超えた、強靭で豊かな経済圏が生まれているはずです。

山を見てください。川を見てください。人を見てください。

ここには、無限の信用創造の源泉（生産能力の種）が眠っています。

あとは、私たちが覚悟を決めて、エンジンのキーを回すだけです。

「何もない」なんて、二度と言わせない。

自らの手で富を生み出し、巡らせる。

そんな誇り高き「自給する地域」への旅を、今ここから始めましょう。

暮らしと循環のデザイン
https://lifedesign.wagamamalive.com/

著：末次克洋

巻末付録

参考文献・出典

本書の執筆にあたり、以下の文献および経済理論、研究成果を参考にいたしました。より深く学びたい方のためのガイドとして掲載します。

【地域経済・循環モデルに関する基礎理論】

- **ニュー・エコノミクス財団 (New Economics Foundation: NEF)**
  - 英国のシンクタンク。本書で解説した「漏れバケツ理論 (Leaky Bucket Theory)」および「地域経済乗数効果 (LM3: Local Multiplier 3)」の提唱元であり、地域内循環の測定手法を確立した。
  - 参考図書：『Plugging the Leaks: Making the Local Economy Work for Us』
- **ジェイン・ジェイコブズ 著『都市の経済学』**
  - 「輸入代替（Import Replacement）」の概念の典拠。都市や地域が発展するのは、外部から購入していたものを自給（自分たちで生産）し始めた時であるという理論的支柱。
- **藻谷浩介 著『里山資本主義』**
  - 金銭的な価値に換算されない「裏山」や「水」などのサブシステム（第1層・第2層）を持つことが、地域の強靭性（レジリエンス）に繋がるという思想的背景。

【貨幣論・信用創造に関する理論】

- **イングランド銀行（Bank of England）『Quarterly Bulletin 2014 Q1』**
  - 「Money creation in the modern economy（現代経済における貨幣の創出）」。銀行による貸出（借入）こそが預金を生み出し、新たな貨幣を創出するという「信用創造」のメカニズムを公式に解説した重要論文。
- **フェリックス・マーティン 著『21世紀の貨幣論』**
  - 貨幣の本質は「商品」ではなく、譲渡可能な「債務の記録（信用）」であるとする歴史的・経済学的背景。

【社会構造・贈与論に関する理論】

- **カール・ポランニー 著『大転換』**
  - 経済を「市場交換（Market）」「再分配（Redistribution）」「互酬（Reciprocity）」の3つの統合様式として捉える枠組み。本書における「3つの経済レイヤー」の社会学的ルーツ。
- **マルセル・モース 著『贈与論』**
  - 第1層（贈与・信用経済）における「お返し」の義務や、コミュニティ維持のメカニズムに関する基礎理論。

謝辞・監修

本書の骨子となる「3つの経済レイヤー図」および地域再生の具体的な実践手法については、長野県における現地フィールドワークでの対話をベースに構成・執筆されました。

地域の未来を切り拓くための実践知をご提供いただいたことに、深く感謝申し上げます。